HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	［展示］平塚直治・直秀の「銹菌研究」来し方 ： 宮部金吾との師弟結びつきを中心に
Citation	北海道大学大学文書館年報, 6, 155-167
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45221
Type	other
File Information	ARHUA6_009.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜ 資　　料 ＞

〔展示〕平塚直治・直秀の「銹菌研究」来し方―宮部金吾との師弟結びつきを中心に―

1．特別企画展について

2010年11月12日、札幌農学校第14期生平塚直治のご令孫西安信氏（工学研究科博士課程1967年修了、学校法人北海道尚志学園理事長、北海道工業大学学長）のご家族、直治の長男で北海道帝国大学農学部1926年卒業の平塚直秀のご子息平塚保之氏（農学研究科修士課程1959年修了、カナダ国立北方森林研究所）のご家族、５名が来館された。これを機に、特別企画展「平塚直治・直秀の「銹菌研究」来し方―宮部金吾との師弟結びつきを中心に―」を、附属図書館北方資料室内で開催した。

また、11月23日には、直治ご令孫西信博氏（医学部1958年卒）・西安信氏・宮田篤子氏のご兄妹のご家族と、直治ご息女高岡治子氏のご家族、19名が来館され、展示をご覧になった。

同展示は、11月12～26日に、一般公開も行なった。



平塚直秀
（高岡治子寄贈資料）



宮部金吾宛て平塚直治・直秀書簡（展示資料14）



平塚直治
（高岡治子寄贈資料）

2．平塚直治・直秀について

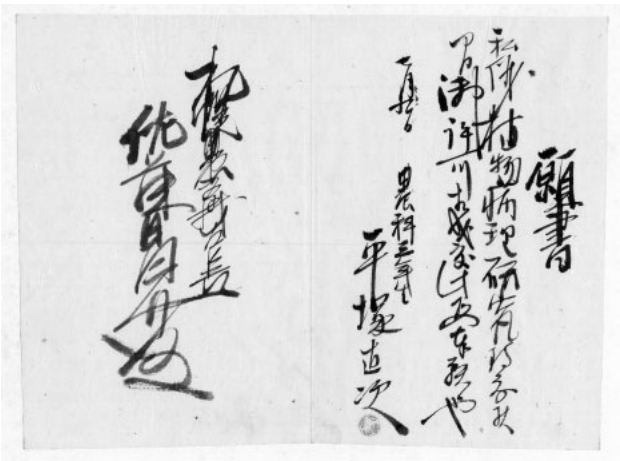
平塚直治（1873-1946年）は、1888年に札幌農学校予備科に入学、1892年農学科に進学し宮部金吾に師事して、銹菌研究を開始した。1896年に卒業論文 On the Melampsorae of Japan.（本邦産メランプソラ属ノ研究）を提出し第14期生として卒業した後、研究生となった。北海道製麻株式会社（後に帝国製麻株式会社）から研究委嘱を受けた宮部が、研究生時代の直治に「亜麻立枯病研究」を研究テーマとして与え、報告書を作成させた。この報

告書が評価され、直治は北海道製麻株式会社技師となり、亜麻の生産と、それを加工する製麻業に従事することとなった。製麻業は、戦前の北海道において主要産業の１つであり、直治は、後に帝国製麻株式会社取締役として札幌産業界・財界で重きを為した[1)]。

直治長男の平塚直秀（1903-2000年）は、1923年北海道帝国大学附属大学予科に入学、農学部農業生物学科で父直治と同じく宮部金吾に師事した。直秀は、直治が北海道製麻株式会社の技師となったことにより断念せざるを得なかった「銹菌研究」を受け継ぎ、大学院を経て、鳥取高等農業学校・東京教育大学で教授を務め、研究者の道を歩んだ。1962年には「銹菌類に関する研究」で日本学士院賞を受賞し、菌類研究の泰斗として大きな足跡を残した[2)]。

３．展示資料について

企画展示では、平塚直治・直秀父子の足跡を、⑴「直治、恩師との出会い」、⑵「直治・直秀、恩師を囲んで」の二部に構成し、大学文書館が所蔵する札幌農学校簿書・帝国大学期簿書等の文書資料、高岡治子氏の寄贈資料のほか、書簡・葉書類（高尾君子氏寄贈、畠忠正氏寄贈、宮部金吾旧蔵書簡）でたどった。



平塚直治の植物病理学専攻願書（1894年）（展示資料３）



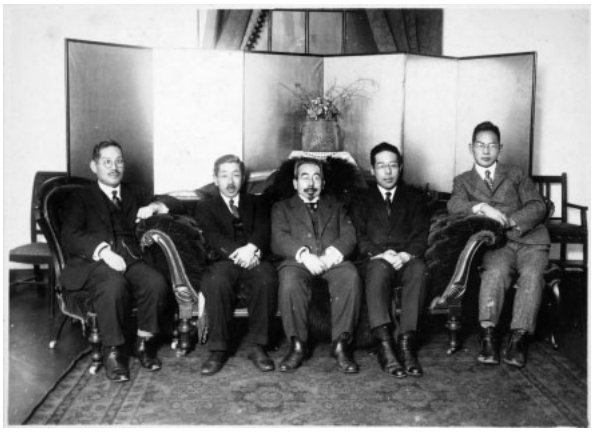
平塚直秀の大学予科入学願書
（1923年）（展示資料13）

４．平塚直治・直秀の「銹菌研究」リレーをめぐって

1944年８月、鳥取農林専門学校教授平塚直秀は、「日本列島層生銹菌科誌」を刊行した。直秀から同論文を受け取った父の直治は、すぐに恩師である北海道帝国大学名誉教授宮部金吾を訪ね、進呈した。直治は重ねて1944年11月19日に宮部に宛てて長い書簡を書き送った（参考資料１）。直治はこの書簡で、自身の始めた「銹菌研究」を息子が受け継いで完

成した喜びと、親子二代にわたって同一の研究テーマを指導した恩師宮部への感謝の念を書き綴っている。

宮部は11月28日、直秀に書状を送り、親子二代にわたって研究を纏めたことについて「学界に於ける美挙」と賞賛し、研究成果についても「完全無欠」、ただただ感嘆の外ない、と手放しで褒め称えた（参考資料２）。



平塚直治・直秀父子と宮部金吾教授（1926年）
中央が宮部金吾教授（展示資料Ｐ７）

直秀は、後年、このときのことを次のように回想している。

> 昭和19年（1944）８月、私は、「日本列島層生銹菌科誌」（Melampsoracearum nipponicarum）と云う表題の研究報文を鳥取農林専門学校学術報告第７巻第２号上に公表することができました。この研究成果こそは、嘗て父が研究を中途で止め、私がその後を受け継いで曲がりなりにも纏めあげた感慨深いものです。［中略］
>
> この「日本列島層生銹菌科誌」は、私にとって忘れることの出来ない感慨深い１篇であります。この論文が出来あがるや、直ちに、まず宮部先生と父に贈呈しましたが、御両人とも非常によろこばれ、特に宮部先生からは身に余る書簡をいただきました[3)]。

〔注〕

1） 平塚直治の略歴については、山本美穂子「平塚直治受講ノート（西信子・西安信氏寄贈）をめぐって――札幌農学校第14期生の学業史――」（『北海道大学大学文書館年報』第２号、2007年３月）、１-28ページを参照した。

2） 平塚直秀の略歴については、『菌蕈研究所研究報告』第38号（日本きのこセンター菌蕈研究所、2001年12月）を参照した。

3） こぶとりのおきな『思い出は草木とともに』（1984年、私家版）、14-15ページ。「こぶとりのおきな」は平塚直秀のペンネーム。

平塚直治略年譜

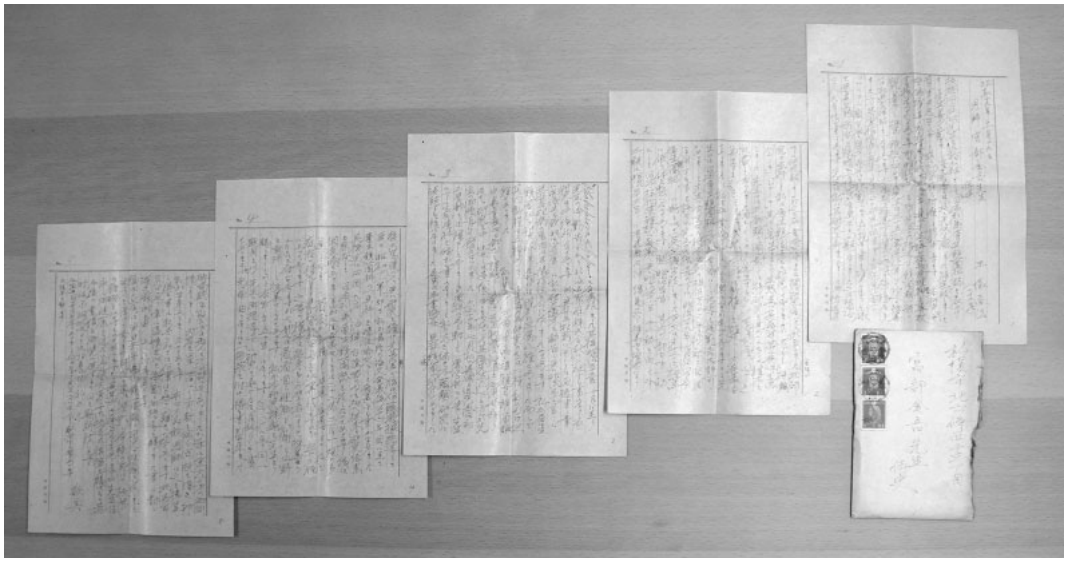
1873年	10月、北海道石狩国札幌郡白石村に生まれる
1888年	３月、公立創成小学校高等科卒業
1888年	９月、札幌農学校予備科第４年級　入学
1889年	９月、札幌農学校予科第３年級　編入
1892年	７月、札幌農学校予科　卒業
1892年	９月、札幌農学校農学科　進学
1893年	７月、校費生となる
1894年	７月、実科演習「植物病理学」（宮部金吾教授担当）を専攻
1895年	５月、本州修学旅行（～７月10日）
1896年	７月、札幌農学校農学科　卒業（第14期生総代） ＊卒業論文　On the Melampsorae of Japan.（本邦産メランプソラ属ノ研究）
1896年	７月、札幌農学校研究生（～10月）
1896年	７月下旬、北海道製麻株式会社委託調査「亜麻立枯病研究調査」を報告
1896年	10月、青森県尋常中学校（弘前）に赴任
1897年	８月、メランプソラ属研究の英文論文を『植物学雑誌』第126号に発表
1898年	４月、メランプソラ属研究の英文論文第二報を『植物学雑誌』第134号に発表
1898年	10月、沖縄県尋常中学校（首里）に赴任
1900年	７月、メランプソラ属研究の英文論文第三報を『植物学雑誌』第161号に発表
1900年	10月、北海道製麻株式会社技師に転任
1900年	12月、北海道農会評議員に就任
1907年	７月、帝国製麻株式会社技師長に就任
1913年	２月、帝国製麻株式会社製線本部長に就任（～1926年３月）
1916年	１月、帝国製麻株式会社札幌支店長に就任（～1930年４月）
1919年	日本植物病理学会評議員に就任（～1946年）
1919年	２月、海外視察（アメリカ・カナダ、～６月） ＊４月15日　坂村徹と共にブルックス邸を訪問
1919年	７月、農学博士
1922年	７月、帝国製麻株式会社取締役に就任（～1938年）
1925年	８月、㈶仙台学寮初代理事に就任
1926年	１月、『亜麻概説』刊行。亜麻図（須崎忠助筆、1925年）を記念附録として配布。
1932年	12月、札幌ロータリー倶楽部理事に就任
1935年	７月、札幌ロータリー倶楽部第二代会長に就任（～1937年）
1946年	３月25日、逝去

平塚直秀略年譜

1903年	8月、北海道夕張郡栗山町に生まれる
1916年	3月、公立北九条尋常高等小学校尋常科 卒業
1920年	5月、北海道庁立札幌第一中学校第5学年在学中、北海道帝国大学附属大学予科 受験合格
1923年	3月、北海道帝国大学附属大学予科 卒業
1923年	4月、北海道帝国大学農学部農業生物学科植物分科 入学
1926年	3月、北海道帝国大学農学部 卒業 ＊卒業論文 Studies on the flax rust.（亜麻錆菌ノ研究）
1926年	4月、北海道帝国大学大学院 入学
1928年	4月、北海道帝国大学農学部講師に就任
1929年	4月、鳥取高等農業学校教授に赴任
1936年	9月、農学博士
1946年	10月、東京農業教育専門学校教授に転任
1949年	8月、東京教育大学教授に就任
1954年	2月、理学博士
1962年	4月、日本植物病理学会会長に就任（1962年度）、日本菌学会会長に就任（～1967年度）
1962年	5月、日本学士院賞受賞（「錆菌に関する研究」）
1967年	3月、東京教育大学教授を退官（4月から名誉教授）
1967年	4月、財団法人全国椎茸普及会（現、財団法人日本きのこセンター）菌蕈研究所所長（～1994年）、桐朋学園大学教授（～1976年）に就任
1973年	11月、日本学士院会員
2000年	7月24日、逝去

《 **参考資料１** 》

宮部金吾宛て平塚直治書簡（1944年11月19日付、札幌）



○封筒

【表】札幌市北六条西十三丁目　宮部金吾先生　侍史

【消印】19.11.21

【切手】大日本帝国郵便　３銭二枚、１銭一枚

【裏】札幌市北七東六丁目十八　平塚直治

【裏／宮部金吾による加筆】直秀君が「日本列島層生銹菌科誌」を発表されたに付父子五十年の研究の結果が纏まつたに対する感想・感謝等

○書状

昭和十九年十一月十九日

恩師宮部金吾先生　　平塚直治

侍史　　（七十二老）

拝啓　本日突然先生を御尋ね致しまして、「日本列島層生銹菌科誌」を差上げまして、先生に喜んで戴きまして、深き感激と満足と光栄を感じました。帰家致しまして、昔の事共思出されまして、茲に所感の一部を披瀝して御礼申上けます。本研究開始の端緒は遠く、私が札幌農学校本科第二年に進み、先生の許に植物病理学を専攻する様になってからであります。即ち明治二十六、七年頃で、先生の御指導にて銹菌類一般の研究に着手し、採集

に鏡検に努めました。先生は三十五、六歳の御壮年にて、附近の採集には私共が御伴致しましたのであります。本菌類を採集するに連れて興味を持つ様になりました。一方、亜麻立枯病病が発生し、先生が之が研究に従事せられ、其病原菌は「フサリアム」菌にて、然も従来欧米にも記載せられざる新種なる事を確められました。依て更に其生態、病状及予防の方法等が重要なる問題となりました。之は明治二十八、九年頃の事であります。先生は私に其研究を命ぜられまして、御指導の下に研究致しましたが、之を卒業論文とするには猶ほ研究の足らざる所がありました。当時、此研究と並行して私は層生銹菌の方をも研究して居りましたが、「ポプラー」、柳類、「ハシノキ」、「シナノキ」、其他に寄生するもの、生態、並に其発芽等に興味を感じました。先生には此部類の菌に対しては特に研究を進められ、多くの標本を秘蔵して居られました。而も「イ、ギリ」に寄生する M. Idesiae miyabe、「シナノキ」に寄生する Pucciniastrum Tiliae miyabe は新種として確定し、未発表のものでありました。私は卒業論文として何れを撰ぶべきか迷ふて居りまするとと、先生には日本層生銹菌科の方を卒業論文にして記述する様、勧告御許可がありまして、先生の貴重なる標本全部を提供せられ、又関係文献を自由に使用する事を許され、先生の御指導の下に明治二十九年七月に日本層生銹菌科の題を以て（英文）提出致しました。英文は先生の御加筆に依り体を整へたのであります。翌明治三十年其内の一部を第一報として日本植物学雑誌に発表し、更に明治三十一年第二報を、而して第三報は明治三十三年に青森県及沖縄島に於て採集せる標本により Phakopsora of Japan を発表致しました。其後明治三十三年十月に至り、先生の御勧告もあり、北海道製麻株式会社に入社する事になり、本研究は中絶致したのであります。然し亜麻立枯病に関しては直接事業に関係ある故、明治三十年に私の研究結果を報告し、更に明治三十六年に亜麻立枯病の原因及其予防法を公に致しましたのであります。私が層生銹菌科の研究致しました時には、僅かに三属八種でありました。而して其内新種は五種ありまして、先生の御研究の分は二種、私の分は三種でありました。私は先生より此広汎なる、而も複雑せる銹菌類中、最も重要なる部分を課題として戴き、先生秘蔵の標本迄御恵与に預りながら、研究を中止せしは遺憾でなりませんでした。其後、先生の門下の方々が先生の御指導にて研究せられました。大正十二年七月、私の長男直秀が（当初、工学部を目標として居りましたが農科に志を転じて）農学部に入学し、先生の下に生物学科を修むる事になりまして、私の志を継ぎ、本菌類の研究に没頭する様になりました。長男の卒業論文は亜麻銹病菌の研究でありました。後、大学院に入り、更に研究を続け、先生御勇退の後は伊藤教授の指導をも受け、昭和十一年即ち私が最終の論文発表後三十六年目に至て、層生銹菌科の一亜科を学位論文として発表する事が出来ました。其後、更に四国、九州、沖縄、台湾等の分を加へ、従来の研究結果を綜合して日本列島層生銹菌誌を為したのであります。猶ほ、調査漏もありましょふが、今回発表せしものは二十二属二百十種の多に達して居りまして、著者が新種として学界に発表せしもの及ひ著者の研究により学名を訂正せし分をも加算致しますれば、五十三種に上って居ります。之等の標本は従来多くの学者によって採集せられたものを含んで居りますが、大部分は著

者自ら健脚を利用し山野を跋渉して採集せしものであります。私が本研究課題を先生より賜りましてから本年にて五十年になります。父子二代に亘り同一題目を以て先生の御指導の下に研究を遂げたなどは珍らしき事でありましょふ。兎に角、曲りなりにも一段落を附け得る事が出来ました。時局柄、出版の方は殆んど不可能に近くありましたが、幸に篤志の方の御同情によりまして、内容を単簡にし、頁数を減し、図版を除き、印刷が出来上りましたのであります。本日、不取敢、恩師に之を捧呈し得る事は、私共に取ては何事にも替へ難き喜であります。此長年月に亘り、常に温情を以て激励と御指導を賜りました事に対し、深き感謝を申し上ぐる次第であります。

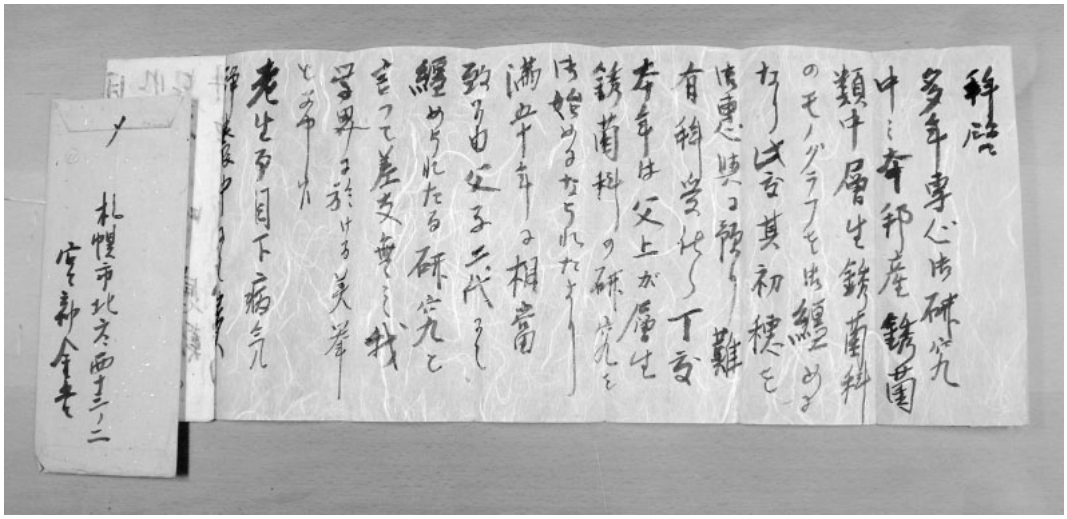
猶ほ、直秀は、東亜共栄圏内銹菌類の研究ヲ課題と致しまして、努力を続けて居ります。何分にも専門学校に奉職の身にて、校務の余暇を以てするのでありますから、其進歩は遅々たるものでありますが、先生には永くご健康を保たれ、今後も相変らず御指導御後援を賜はると共に、今後の業績を御覧に供するの日を期待致します。

時候不順、此上とも御加養、切に祈上候。　　敬具

今回送附の分は見本でありまして、何れ改めて先生方に本人より献本する筈であります。御諒承を願へます。

《 参考資料２ 》

平塚直秀宛て宮部金吾書簡（1944年11月28日付、札幌）



○封筒
【表】鳥取市西町一二七　平塚直秀様
【消印】解読不能
【切手】大日本帝国郵便　七銭
【裏】札幌市北六西十三ノ二　宮部金吾

○書状
拝啓
多年専心御研究中之本邦産錆菌類中層生錆菌科のモノグラフを御纏めになり、此度其初穂を御恵与に預り、難有拝受仕候。丁度本年は父上が層生錆菌科の研究を御始めになられたより満五十年に相当致候由、父子二代にて纏められたる研究と言って差支無之、我学界に於ける美挙と可申候。
老生事、目下病気静養中にて、貴論文を詳細謹読仕兼候へ共、一と通り目を通ふし候処に依れば、実に完全無欠と可申、唯々感嘆の外無之候。只、時局下用紙印刷等の御都合にて斯かるモノグラフに必要なる図画を割愛され、又、学界共通の語にて御発表になり得ざりしことを遺憾に存上候。
御尊父様の御喜び、譬ふるにものなく、長い〳〵感想文を寄せられ申候。
茲に御成功を祝し、御孝道を完ふせられしことを心より慶賀仕候。

敬具

十一月廿八日

宮部金吾

平塚直秀様

［凡例］
⑴　原則として漢字の旧字・異体字・略字・俗字などを正字に改めた。
⑵　原則として変態仮名を現代仮名遣いに改めた。
⑶　適宜、仮名に濁点を附した。
⑷　適宜、句読点を補った。
⑸　明らかな誤記・欠落を訂正した。

展示資料目録

１．陳列資料目録

Ⅰ．直治、恩師との出会い	
1	平塚直治「入学願」（1888年７月６日付） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書877）
	平塚直治が札幌農学校予備科受験の際に提出した「入学願」（1888年７月６日）。簿書の前後には「履歴書」（1888年７月）、入学の際に提出した「入学証書」（1888年８月27日）も綴られている。 1887～88年にかけて、公立創成小学校生徒の平塚直治は、「札幌農学校の予科に入学するのが唯一の目標」として、北海英語学校や敬業塾といった私立学校にも通って受験勉強に励んだ。1888年８月、平塚直治は札幌農学校予備科の入学試験を受け、競争倍率３倍の難関を突破して合格した。
2	札幌農学校第14期生（1892年、予科卒業前後） 写真／『故栃内壬五郎君追憶集』口絵（附属図書館北方資料室蔵）
	３列目右から３番目が平塚直治、２列目右から２番目が栃内（旧姓添田）壬五郎。平塚直治は栃内壬五郎と北海英語学校で出会い、札幌農学校でも第14期生として共に学んだ。
3	平塚直治「（実科演習専攻）願書」（1894年７月９日、農学科３年級進級直前） 文書／大学文書館蔵（高尾彰一旧蔵資料00055-６）
	1894年より、札幌農学校では、農学科３～４年級生に、①農業経済学、②植物病理学、③農芸化学の３実科演習と農業実習（甲組：農芸、乙組：畜産）の専攻コースを設けた。平塚直治は、３年級で唯一、「植物病理学」を専攻して、４年級の千石興太郎・高橋良直・黒澤艮平と共に、宮部金吾教授に師事した。
4	平塚直治「地質学科修学旅行報文」（1894年６月３日付、農学科２年級） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書450）
	1894年５月10～13日、札幌農学校農・工学科２年級生は、石川貞治助教授の引率で、余市郡内ポンシカリペツ鉱山（北海道鉱山会社所有）方面に、地質学実地研究のため修学旅行をした。同報文は、２年級総代として平塚直治が佐藤昌介校長に提出した報文。行程・採集植物・鉱物目録のほか、旅程図・溶鉱炉図などを描画している。
5	平塚直治「明治二十八年夏期修学旅行報告」（1895年、農学科３年級） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書501）
	平塚直治は、1895年５月18日～７月７日にかけて、仙台・東京・神戸・京都など約１ヶ月半にわたり見学旅行をした。東京では帝国大学理科大学・農科大学・小石川植物園などを見学し、京都では第４回内国勧業博覧会を観覧、荻浜（宮城県石巻）・京都・日光では植物採集（菌類や顕花植物）も行なった。
6	平塚直治に発行された「札幌農学校之証」（1895年５月16日、農学科３年級） 文書／大学文書館蔵（高尾彰一旧蔵資料00003）
	修学旅行の際に汽車・汽船賃を割り引いてもらうための証明書。平塚直治は、1895年５月18日～７月７日にかけて、仙台・東京・京都など約１ヶ月半にわたり見学旅行をした。

7	平塚直治「卒業論文大意」（1896年７月、農学科４年級） 文書／大学文書館蔵（札幌農学校簿書738） 植物病理学を専攻した平塚直治は、札幌近郊で発生した亜麻立枯病の研究を進めるとともに、ポプラ、ハンノキ、シナノキなどに寄生する錆菌の生態に興味を抱き、錆菌研究も進めた。宮部金吾教授は、平塚直治に、宮部自身も力を注いでいた錆菌研究を卒業論文のテーマとして勧め、所蔵標本の全てを提供し、新種を発表することも認めた。
8	平塚直治「亜麻立枯病研究報告」（1896年７月、研究生） 文書／附属図書館北方資料室蔵 1896年７月28日、北海道製麻株式会社が、札幌農学校に、琴似・発寒・丘珠・当別の諸村で発生した「亜麻作被害」の研究調査を依頼した。札幌農学校は、研究生である平塚直治に宮部金吾教授の指導のもと、研究調査することを命じた。平塚直治は、７月下旬～９月下旬の約60日間、鉢植・圃場・被害地で病因試験と予防法試験を行い、立枯病の要因は土壌中の Fusarium 菌の寄生によることを証明し、予防法として２年以上の輪作を推奨した。これは日本における亜麻立枯病に関する学術的研究の嚆矢となった。
9	帝国製麻株式会社（1920年代頃） 写真／大学文書館蔵（高岡治子寄贈資料）
Ⅱ．直治・直秀、恩師を囲んで	
10	宮部金吾宛て平塚直治書簡（1919年４月14日付、ボストン） 封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡） 1919年４月13日、視察のため渡米していた平塚直治は、ボストンの電車内で、W. P. ブルックス（札幌農学校外国人教師、在任期間1877年１月６日～1888年10月20日、農学担当・校園監督）の子息夫妻に出遭い、15日には W. P. ブルックスの自宅を訪問することにした。札幌農学校在学の頃、W. P. ブルックスに師事していた宮部金吾に、平塚直治は封書で伝えた。
11	William P.Brooks 肖像 写真／大学文書館蔵（Sarah Reeves[W.P.Brooks 曾孫］寄贈資料）
12	坂村徹「海外留学日記」（1919年４月15日の条） 日記／大学文書館蔵（鳥山英雄寄贈資料） 1919年４月15日、平塚直治は、留学中の後輩坂村徹（1913東北帝国大学農科大学卒業）と共にアマーストの W. P. ブルックスを訪ね、夕食をご馳走になり、懐旧談に花を咲かせた。1920年帰国した坂村徹は北海道帝国大学教授に就き、大学在学中の平塚直秀に、植物生理学実験・細胞学を教授した（帝国大学期簿書128）。
13	平塚直秀「入学願書」（1920年５月22日付） 文書／大学文書館蔵（帝国大学期簿書196） 平塚直秀は、北海道庁立札幌第一中学校第５学年在学中の1920年５月、北海道帝国大学附属大学予科（独語学級、農学部進入志願）を受験して合格した。直秀がドイツ語を選択したのは、父直治がドイツの菌類学者 P. Dietel 博士、P. Sydow 博士らと交流があったこと、大学卒業後には菌類分類学研究のためにドイツ留学を志していたためであった（こぶとりのおきな［平塚直秀］『思い出は草木とともに XV』1995年、127頁）。
14	宮部金吾宛て平塚直治・直秀書簡（1922年10月29日付、大沼） 絵葉書／大学文書館蔵（畠忠正寄贈資料0059） 平塚直治は、江差方面出張のついでに、静養をかねて大沼と湯ノ川に滞在した。悪天候にもかかわらず、直治は直秀（大学予科３年生）と共に、湯ノ川では30分間、大沼では３時間、植物標本採集に臨んだことを、宮部金吾教授に絵はがきに綴って送った。

15	植物学教室第２回懇親会（1923年６月１日付出田新宛て書簡、札幌） 絵葉書／大学文書館蔵（持田誠寄贈資料0023）
	1923年６月１日、札幌区北２条西２丁目のレストラン有合亭にて、植物学教室第２回懇親会が開催された。山口県在住のため、出席ができなかった出田新（札幌農学校第11期生）のために、教室メンバーは寄せ書き（郵便はがき）を出田新に送った。寄せ書きには、宮部金吾教授をはじめ、平塚直治・直秀父子、坂村徹、栃内吉彦、今井三子、舘脇操、工藤祐舜、本間ヤス、鈴木限三などのサインが見られる。
16	レストラン有合亭（札幌区北２条西２丁目） 絵葉書／大学文書館蔵（持田誠寄贈資料0024）
17	平塚直秀「日本列島層生銹菌科誌」 （『鳥取農林専門学校学術報告』第７巻第２号、1944年８月） 雑誌／大学文書館蔵（植物学教室図書室旧蔵論文別刷コレクション）
	平塚直治・直秀父子の50年間に及ぶ銹菌研究を集大成した論文。二人の恩師であった宮部金吾に進呈している。直秀は、「この研究成果こそは、嘗て父が研究を中途で止め、私がその後を受け継いで曲がりなりにも纏めあげた感慨深いものです。……この論文が出来あがるや、直ちに、まず宮部先生と父に贈呈しましたが、御両人とも非常によろこばれ、特に宮部先生からは身に余る書簡をいただきました」（こぶとりのおきな『思い出は草木とともに』1984年）と回想している。
18	宮部金吾宛て平塚直治書簡（1944年11月19日付、札幌） 封書／大学文書館蔵（宮部金吾旧蔵書簡）
	進呈した「日本列島層生銹菌科誌」について、親子への宮部の指導に対し深い感謝の念を述べている。
19	平塚直秀宛て宮部金吾書簡（1944年11月28日付、札幌） 封書／大学文書館蔵（平塚直秀旧蔵書簡）
	「日本列島層生銹菌科誌」進呈に対する礼状。親子二代にわたる業績を賞賛している。一連の直治・直秀と恩師宮部金吾の書簡や回想には、長年にわたる深く強い師弟関係が表われている。

2．パネル目録

Ｐ１	平塚直治「演武場の大時計」 （附属図書館・大学文書館共催企画展示「札幌農学校生の学生群像Ⅰ」パネル） 私は丁度［明治］二十五年の七月から、二十九年の七月まで、四ケ年間、此の建物［演武場］で御厄介になりました。植物を宮部［金吾］先生に、農学を南［鷹次郎］・佐藤［昌介］両先生に、昆虫を橋本［左五郎］先生にお習ひしました。階上のこの会議室が植物の実験室に充てられてゐて、宮部先生は菌類の培養をされてゐた。私は在校二年目から、此の実験室の仕事をすること丶なつたが、毎定時に大時計が鳴ると、建物が振動するのでその度毎によく懸滴培養器の懸滴が落ちて、実験がだめになるので、これには実際泣かされました。 （『時計台建物修築記念誌』、［　］は補語）
Ｐ２	植物病理学教室創設の頃（1895年） 写真／植物園蔵（宮部金吾旧蔵写真0474-８） 前列左より、宮部金吾教授、黒澤艮平（13期生）、高橋良直（13期生）。後列左より、平塚直治（14期生）、千石興太郎（13期生）、徳淵永治郎（植物園雇）。
Ｐ３	札幌農学校第14期生卒業記念（1896年７月） 写真／植物園蔵（宮部金吾旧蔵写真0474-14） 後列左２番目が平塚直治。前列は農学科／工学科担当教官。前列左より、南鷹次郎教授（農学担当）、宮部金吾教授（植物学・植物病理学担当）、佐藤昌介校長（農業経済学担当）、新渡戸稲造教授（農政学担当）、吉井豊造教授（農芸化学担当）。
Ｐ４	亜麻の図（1925年、須崎忠助筆） 彩色図／大学文書館蔵（高岡治子寄贈資料） 平塚直治が亜麻事業に携わって25周年を記念し、画工須崎忠助に依頼して作製したもの。右が「繊維亜麻」、中央が「種子亜麻」、左が「花亜麻」。
Ｐ５	植物学教室員（1927年11月16日） 写真／植物園蔵（宮部金吾旧蔵写真0478-２） 左列左２番目が平塚直秀（大学院生の頃）。栃内吉彦助教授留学送別記念写真。
Ｐ６	植物学教室員（1926年５月18日） 写真／大学書館蔵（持田誠寄贈資料00070） 前列中央が宮部金吾教授、右端が伊藤誠哉教授。
Ｐ７	平塚直治・直秀父子と植物病理学教官たち（1926年） 写真／大学文書館蔵（高岡治子寄贈資料） 左より平塚直治、伊藤誠哉教授、宮部金吾教授、栃内吉彦助教授、平塚直秀。